

支え合うということ

沼崎 航太

「航太、みんな元気だったんだあね。家は
大丈夫だったの。」

三月二十日、両親と姉、そして僕は、入院
中の叔父の見舞いに行った。三月十一日の震
災以来、連絡もとれずにいた叔父は、これま
でに見たことのない笑顔と喜びを全身で表し
てくれた。やはり、叔父は家族の一員だ！と
感じ、こみ上げてくる涙をこらえて叔父の言

葉に耳を傾けた。

母の弟である叔父は、精神的な発達に障害
があり、幼少期から入院している。人とのコ
ミュニケーションが苦手で、会話が一方通行
の時が多く、同じことを何度もくり返し話す。

両親は、毎月叔父と面会し、時には外出し
て食事や買い物をして一緒に時間を過ごし
ている。姉や僕は、年一回の文化祭に行っ
て食堂で昼食をとったり、文化祭での作品を鑑賞
する。叔父は、毎年数回しか顔を合わせてい

ない姉と僕に会えるのを本当に楽しみにしてくれている。別れるときも

「また来てね。待ってるからね。」

と、握手を求めてくる。姉はニッコリして手

を握っているが、僕は――。僕は、気持ちの

こもらない手を差し出してしまふ。そして、

病院を出た後に何ともやるせない感情がふさ

出してくる自分に腹立たしさを覚えるのだ。

僕が小学校の低学年のときだったろうか。

「あんな叔父ちゃんところ、行きたくない。」

文化祭に家族で出かける日の朝、思わず口に出してしまった。

「いいよ。無理しなくても。」

母はこんな言い方をした僕に穏やかな口調で

応えた。それも、ほほ笑みながら。怒られる

とビクついていたのに不思議だった。なぜ

その時、母がほほ笑んだのか、幼なかつた僕

には分からなかつたし、知りたくもなかつた。

今思い返すと、自分は叔父から逃げたかっ

のだと思う。

僕が中一の冬休み中、祖父が病気で天国へと旅立った。もちろん、入院中の祖父は火葬にも葬儀にも参列することとはなかった。そして祖父の死を知らせたのは半年後くらい経ってからだろうか。急な訃報に、叔父が興奮しないようにとの母の計らいだったらしい。自分の父親の最期を看取ることができなかった叔父のことが不憫でならなかった。普通の会話ができないとはいえ、祖父も亡くなる前に一目だけでも会いたかったのではないだろう

か。切なさが脳裏をぐるぐると渦巻いた。っどいちやんに会わせなくて良かったの。葬儀が終わり、帰宅してから母に問いかけた。そのとき母は静かに語り始めた。母が小学校に入学するあたり（叔父が三、四才頃）から叔父の精神的な発達の遅れが顕著になり、行動にも特異な面が見えてきたこと。そのうち祖父母も心身共に疲れ果て、家族がバウバウになりそうだったこと。姉であった小学生の母も、周囲に特異な目で見られるのが嫌で、

誰にも苦しさも吐露できなかつたこと。そして叔父が入院してからも面会することになりの抵抗があり、自責の念に駆られていたことを。そのとき、僕はイツとした。小学生だった自分が文化祭に行くのを拒んだときに無理強いしなかつた母の思いに気づかされた。障害のある叔父を受け入れるまでに、かなりの年月がかかっていたのだ。そうして家族と共に叔父と向き合って生きてきた祖父は、叔父に自分の衰弱した姿を見せたくないことを母に伝えていたらしい。

「航太も、少しずつ分かってくれればいいからね。少しずつ。」

母は諭すように言った。

僕は、叔父の障害を意識しすぎて、病人だから仕方ないと考えるようにし、心の中で自分の逃げたい思いを押しつぶしてきた。あのとき母から聞かされたことで、心のつかえがほどけてきたようだった。叔父の存在がある、たからこそ、障害者を家族に持つことの重み

と葛藤しながら支え合うということも改めて見つめ直すことができたのだ。

叔父の文化祭に出向くと医師や看護師の他に、患者とその家族の心身のケアに携わり日常生活の質の向上とコミュニケーション能力を高めるための病院での行事、食事、服薬、リハビリ等にあたる仕事をしている方々が僕たち家族を温かく迎え入れ声をしてくれる。昨年秋での文化祭では、臨床心理士、理学療法士、作業療法士の方々の仕事内容が掲

示されていて、叔父はこんなふうに色々な方々から支援され見守られていることも知った。僕も、将来、障害者の方々やその家族の心に寄り添える仕事に就きたいと思う。自分自身もそうだが障害のある方や高齢者の方の心身やその家族のことを理解するのは容易ではないと思うが、少しずつでも同じ人間としてお互いを思いやっていたいける優しい世の中になっ
てほしい。そう思いながら先日
の面会では叔父の手をギュッと握った。